

カウンセリングにおける“癒し”について

—おとぎ話「いばら姫」と「三枚の羽」をめぐる—

氏原 寛

On “healing” in counseling—

Some considerations upon fairytales 「Briar Rose」 and 「Three Feathers」

Hiroshi UJIHARA

1. 空間構造

癒しには治療とはやや違ったニュアンスがある。治療にはどちらかといえば治すという姿勢が強いのに、癒すには治るという含みが大きいからである。しかしどちらの場合にも、カウンセラーが媒介としてクライアントの傍にいないければならない。カウンセラーはクライアントが癒されるために何かをしなければならぬからである。しかし、ある意味でクライアントはひとりで治ってゆくとすれば、傍にいるカウンセラーは何をするのか。河合はその場合しばしば、「何もしないことをする」という(1992)。これは一見した所、まったく何もしないことと変わらない。しかし通常、何かするよりも何倍ものエネルギーの要る作業である。この、カウンセリングの実践家ならば体験的に分っていることを、どのように把えるか、ないし記述するかは難しい。しかし私は、ここでも河合の中空構造の概念(河合 1982)がきわめて適切なのではないか、と思っている。

この概念は日本神話、とくに古事記の分析から抽出されてきたものである。たとえばアマテラスとスサノオという二人の対立する主人公の間にツクヨミという無爲の神がいること、日本神話にはそういう三人組が他にも多くあり、そこに実は日本人心性の特色があるのではないか、ということである。彼は天皇制というわが国の類まれな制度のなかにもそれを見ているが、その問題については、ここで深入りすることはできない。彼によれば、もし西洋的に考えるとすれば、アマテラスとスサノオはことごとく対立する神性であり、それらが対決することによって高次の統合が生じることになる。しかしわが国の場合、アマテラスはスサノオあつてのアマテラスであり、スサノオもまたアマテラスとの関わりにおいてこそ意味をもつ存在である。そして両者を仲介してそのバランスを保のがツクヨミの仕事だ、とするのである。

もしツクヨミがいなければ、アマテラスはアマテラスそのものとなり、その限りでそのイメージを精細に描き出せば出す程、その本質的な部分は中空に消え、いわば生氣のない幾何学的図像に墮してしまう。スサノオについても同じである。中空を通して眺めてはじめて、両者とも本来の姿を現わす。しかもそこにはことばがない。ツクヨミは語らないし。

語られることもめったにないからである。だから言語レベルでこの部分を把握しようとするれば、それは文字通り空なのである。神話がどこからどのようにして生じてきたのかについて考えることは、筆者の手に余る。しかしそれが、ある時、ことば以前、イメージ以前の領域からたち現われたとは仮定してもよいのであろう。それは未分化ではあるがエネルギーに満ちた領域である。

おそらくそれを感覚レベルの意識として把えることが可能である。乳幼児は母親（またはその代理）にことばがけされることによって、バラバラの身体感覚を纏った身体像として凝集させ、それが自我意識の基盤になるという（ドルト 1994）。この場合、彼らに母親のことばを理解する能力はまだ備わっていないのだが、母子一体の未分化な状況が、母親の纏った感覚を何となく子どもに伝えるらしい。

ここでことばの果たす役割は極めて大きいのだが、それは感覚レベルの意識、体感のあればこそである。大切なのは母子が二人して作る場の状況、私でもあればあなたでもあり、あなたでもなければ私でもない、一種融合した感覚である。ことば以前の体験と考えてよい。赤ん坊はこの体験を通して母を見、母もまたこの体験を通して赤ん坊を見ている。意識レベルでは客体としてのお互いを見ているのだが、感覚的、あえていえば無意識的には、さらに私の定義（氏原 1993）に従えば「意識の場」の背景では、お互いの一体感が感じられている。こうした感じが母親のことばかけで的確に表される時、子どもの全体としての身体感覚、ひいては自我基盤の形成されることはすでに述べた。

ところでことばにはもう一つの働きがある。分類機能である。これは、対象をある一面でわり切ってしまう。茸を見れば食べられるかどうか、ヘビを見れば毒蛇か否か、人を見れば敵か見方かを見分けることである。見分けを誤るとしばしば致命的な結果に通じる。しかし見分けの場合、対象のもつ全体的な姿は見失われてしまう。同時に、対象に対する全体としてのおのれの反応の大部分も抑制される。現実適応を考える場合、この分類は不可欠である。子どもの時から育てた仔牛は、時には家族の一員であり、仲間でもあるが、同時に財産でもあり貴重な食料になることもある。こうしたそのつどの使い分けができなければ、牛を飼う意味は失われる。しかしある一面を強調する、たとえば食べ物としてわり切る時、他の側面は切り捨てられる。同時にそれぞれの部分に対応していた自分の諸側面も切り捨てられる。しかしそのことはどこかで感じられている。仲間でもある牛を屠らねばならぬ時、多かれ少なかから犠牲としての意味の生ずるのはそのためである。例としてアイヌの熊マツリなどが挙げられよう。

いずれにせよ、われわれが言語レベルないしイメージレベルで把えている体験の背景には、厩大な感覚レベルの体験の層がある。言語ないしイメージレベルの意識とは、いわばその象徴に近い。その層との関わりを失うと、ことばもイメージも、さらにはそれによって把えられていた世界そのものも生気を失う。この背景と対象との間に、暗黙の中に前提されていることば以前の領域、これが感覚の、おそらくは身体プロセスともつながった心の領域であり、これこそが河合のいう中空領域である、と考えるとよいのではないか。

そして、この領域を言語化したものがおとぎ話である、ということについては以前論じたことがある（氏原 1989）。リュウティ(1974)のいうおとぎ話の平面性とか一次元性を、自我（ことば）成立以前の心の動きと考えるのである。だからこそ、ベッテルハイム(1987)やマレ(1983)の子どもたちは、おとぎ話を聞かされるだけで気持がおちついた。そ

の際、解釈めいたものを一切しない方がよい、というベッテルハイムの指摘は重要である。それは、子どもたちの中に流れている言語以前の心の動きが、おとぎ話によって具体化されているのだからである。それはドルトの赤ちゃんが、あくびをしたり手足を伸ばしたりする時感ずる身体感覚を、母親のこぼかけによって自分のものとして感じてゆくプロセスに近い。この場合、ことばの働きは象徴機能であり、何かをさし示すものではない。

私自身は、感情を、主体が客体を主体との関わりでうけとめた時生ずる意識状態、として考えている（氏原 1993）。その限りリューティ（前掲書）が、おとぎ話の主人公には感情がないというのは、自我が（したがって客体世界も、）成立する以前の心の動きが描かれているからだ、と思っている。

そこで今回はグリム童話の中の、「いばら姫」と「三枚の羽」をとり上げて、それがカウンセリングによる心の癒しとどうつながるのか、について考えてみたい。

2. 「いばら姫」

周知ではあろうが始めに物語の要約を示す。「昔、子どもを欲しがっている王とお妃があった。ある日お妃が水浴びしていると、水のなかから蛙が出てきて、一年たたぬうちに姫を授かる、と予言した。その通り美しい姫が生まれ祝いの宴が開かれた。しかし黄金の皿が12枚しかなかったので13人の仙女の中の12人しか招かれなかった。宴が終りに近づいて仙女たちが徳や美や富を贈り物として姫に授けたところに、13人目の仙女が突然現われて、姫は15才の時つむに突かれて死ぬ、と言って姿を消した。最後に残っていた12人目の仙女が、死ぬのではなく100年の間眠りこむ、と言うことで、その呪いを和らげるのが精一杯であった。

王は国中のつむを焼き捨てるように命じたが、姫が15才になった時、お妃と共に出かけることになった。留守の間お姫さまは城の中をあちこち見て歩き、とうとう塔の上の、さびのついた鍵のささった扉の前に来る。開けるとお婆さんがつむを手にして麻を紡いでいた。姫が自分もやろうとつむをとった途端、つむがさきりそのまま眠りこんでしまった。同時に、丁度帰りついた王もお妃も、家来たちも召使いも、馬も犬も壁の蝨までもが眠りこんだ。それと共に城の周りのいばらの垣が茂りはじめ、屋根の上の旗さへ隠すほどになった。

しかし美しいいばら姫が眠っている噂は国中に広まり、多くの王子たちが生垣を開いて中に入ろうとした。しかしみんないばらにとりこまれて無残に死んだ。ちょうど100年たった時、一人の王子が現われると花の咲いたいばらの垣は自然に開き、塔まで行きついた王子は部屋に眠っている姫にキスをし、姫が目覚めると同時に王さまも家来たちも犬も馬もすべて目を覚ました。やがて王子と姫の婚礼が盛大にとり行われた。」

(1) 蛙

河合(1977)は、物語の最初に現われる蛙を、それが水陸両棲ということから、意識とを無意識をつなぐもの、として説明している。醜い存在として美しいお姫さまの影につきまとう、というのである。フォン フランツ(1979)は、この蛙を、目に見えぬ父、あるい

はやがて生まれてくる子どもとも見なしうるという。長びく不毛の時期は、無意識の中で何か準備されているのであり、蛙はそれを告げるものとするのである。エレンベルガー（1980）のいう創造の病いに近い考え方である。さらに「三枚の羽」に現われるひき蛙との関連で性的欲求、自然のわき返る生命感を表わすともいう。昔は愛のまじないに使われ、時には出産を助ける子宝を授ける母的存在とみなされた。だからファルロスでもあり、子宮でもあり、しばしば子どもでもある（子どものことを蛙っ子〔Fröschle〕ということがある）。ひき蛙の毒が魔女と結びつけられている地方は多い。同じグリム童話の「蛙の王さま」に見られる執拗さは、意識に近づいた無意識のエネルギーを示している、という。Heuscher（1974）は、蛙を人魚やサイレンや漁師たちになぞらえられた水に親しむものとして、流動的な心的世界と固定的な現実世界とをつなぐものとしている。無意識と意識を媒介するという、河合やフォン・フランツの考えと大筋において変っていない。ベッテルハイム（1979）は、お妃が「一年たたないうちに」姫を生んだことから、蛙の訪れた時受胎したと述べている。

王と王妃については、ユングによる詳細な説明がある（「結合の神秘」1968）。（Frazer 1978）にはその具体例が多くのもっている。要するに、集合的意識を代表する存在である。長い間後つぎに恵まれないのは、状況が固定化し新しいものが生まれるだけの豊かさが失なわれているのである。したがって蛙の訪れは、ゆきづまった王国に他界から豊穡の湿り気をもたらすもの、と考えることができる。そしておそらく、13人目の仙女と同じ役割を担っている。

(2) 13人目の仙女

13人目の仙女については諸家の見解がある。ここで数の象徴論に立ち入る余裕はない。ただし12が 3×4 であり、 $3 + 4$ の7と共に、キリスト教、ヒンドゥー教、道教などに、複雑なそれらの意味づけのあることは指摘しておきたい（シュヴァリエ他1996）。ちなみに、いばら姫の異本であるペローの「眠れる森の美女」の妖精の数は7人である。いずれにしる7も12も一応完成された数と見なされている。そこへ13番目（ペローでは8番目）の招かれざる客が闖入する。河合は、キリスト教の三位一体に第4のものをどうして組みこむかが大きな問題であることを指摘し、13番目の仙女をその第4のものになぞらえている。いうまでもなく、父—聖霊—キリストの三位一体に欠けているのはマリア=母=女性=悪である。これはいわば完全性と全体性の対立であり、古くはキリスト教とグノーシス派の対立でもあったらしい。錬金術はこの第4のものをいかに三位一体に組みこむかの、その限り異端の業であった（ユング 1990）。王国には王もお妃も揃っており、その限り一つの纏った世界を形作っていたのであろう。しかしすでに述べたように、長らく王妃は子宝に恵まれなかった。つまり不毛の状態が続いていたのである。そこに他界から蛙が訪れ、それが姫の誕生につながった。つまり異質のものの訪れが、地上に新しい活気をもたらした。仙女の訪れは、完全であるために悪の部分をしめ出し全体性が失われた世界に、いわば欠けた部分が現われた、と見ることができる。

ベッテルハイム（前掲者）は、仙女の出現を生理の到来とみる。身体プロセスはいやおうなしに進行し、思春期から青年期にかけてまさしく花開く乙女たちを現出せしめる。しかしそのことが、やがてくる老いと死をすでに含んでいることはいうまでもない。陰暦の

1か月は月経周期の28日に当り、13番目の仙女はその13番目の月、というわけである。リューティ（前掲者）は、どちらかという文芸批評的な立場から、できるだけ解釈を手控えるべきだとして、この話が死と復活、春から夏・秋と経めぐる自然のくり返しを反映しているとしている。フォン フランツは姫とペルセポネとの類似をあげている。この話の起源を遡ればギリシア・ローマ以来のテーマにつき当る、というのである。ペルセポネは冥界にさらわれるが、それが姫の眠りに当たる。しかし一生のうち三分の二は地上に帰り、その間地上には豊穡がもたらされる。それが百年の後の目覚めに相当する。そして仙女の怒りは娘を奪われた大女神デメテル、つまり傷つけられた太母の怒りとするのである。ユング（1989）よれば、キリスト教には神の花火が人間に宿しているとする伝説がある。マリアに聖霊が宿するという観念がすでにそれを反映している。神が人間において実現されるべきである以上、肉体、女性を通して現われることが不可欠である。その結果がおそらくイエス・キリストであり、肉体と精神の葛藤からさまざまな苦難の生ずるのは聖書のいう通りである。そして十字架からの昇天は、ある意味で体という桎梏を逃れて精神が再び天に還ったことなのであろう。そしてあらためて地上に復活する。つまり女性＝肉体は、神性が地上に具体化するための必然の条件なのであるが、それが同時に神性を地上に閉じこめるマイナスの意味をもつ。女性＝肉体＝大地＝悪という系列は多分そこに発している。

フォン フランツのいう傷つけられた太母も同様の意味をもつ。父と子と聖霊の三位一体の男性的教理にはうけ入れがたい、異教の大女神なのである。しかし中世を通じてのマリア信仰に示されるように、そして20世紀半ばのマリア神昇天の教義の採択に表われているように、カトリック世界においてさえ女性々のとり入れは不可避の状況が生じている。「いばら姫」の話がいつ頃のものかはとも角、13人目の仙女は誕生の宴に招かれることはなく、しかし不可欠の闖入者として不吉な予言をもたらす。そしてその予言はうけ容れられねばならない。三位一体の完全性を補って、全体性を表わす四性を実現するために、である。その場合3あるいは12についてこだわる必要はない。13人目の仙女には肯定的な意味も含まれているはずである。ただしフォン フランツは、いばら姫の百年の眠りに悪しきマザーコンプレックスを見て、必ずしも肯定的意味を強調していない。

(3) つむ

ところでつむである。これは糸紡ぎの道具であり、本来は女性固有の仕事を表わす。フォン フランツはここでも運命の糸を紡ぐ三人の女神をあげる。王は国中のつむを焼かせるが、リューティはそれについて、それまで見たことのなかったことがかえって姫の好奇心を刺激して、老婆のつむに触れさせてしまったのだという。エディプスが父王を殺したくないばかりに、かえって父を殺すはめに陥ったように、ここには人間の意思をこえた運命のはからいが感じられる。ベッテルハイムの言うように、生理の時は（ということは老いも死も）いやおうなしに娘たちに訪れるのである。また妊娠した母親は、生れてくる子どもについてさまざまな空想の糸を紡ぎ出す。魔女のより糸にはその邪悪な願望がそっくり紡ぎこまれる。もちろん突き刺し出血させるつむにはファルロスの意味もある。河合も日本の昔話の一つを紹介しながら、運命に対するヨーロッパ人と日本人の対応の差に言及している。

紡ぐことについて一風変わった解釈をするのが Heuscher である。彼はそれを考えを紡

ぐことに結びつける。そして余りに合理的な態度が感情を凍りつかせ、それが世界との生き生きとした関わりを失わせるのだ、という。それがいばら姫の100年の眠りにつながるのである。彼はこの物語全体を、子ども時代の活気に満ちた、ある意味で非現実的な天国的状况が、思春期において現実的物質の世界に直面せざるをえず、それがどのように克服されてゆくかを描いたものとしている。らせん階段を登って塔の上の鍵をさした小部屋に入ることは、そのまま一種知性の高みへの登攀とされている。らせん階段、鍵と鍵穴などからこれを性交を表わす（あまりにもフロイド的紋切り型！）とするベッテルハイムとは、まったく逆の解釈である。いずれにせよ、つむ、あるいは紡ぐことが、生理をも含め、人間の思想をこえた運命的なものを指す、ということでは同じことをいってると考えてよい。

(4) 思春期

以上、さまざまな論者の多様な解釈について述べてきた。おそらくはそのどれもが当てているのであろう。1で述べたように、われわれの心の層は多重である。それらがそれなりに一つの纏りを保っていなければならない。13人目の仙女について、それを、自我が十分に配慮することを怠った、つまり忘れられた心の一部として諸家の考えていることはすでに述べた。筆者は意識の場という考え方を提唱し、言語レベル、感情レベル、感覚レベル、身体レベルの意識が全体として一つの場を形作っていると考えている。(氏原 1993)。それによれば感覚レベルの意識は身体プロセスにつながっており、定義次第で意識とも無意識ともいえる。それだけにこのレベルの意識は、身体的発達に伴って突如生ずることがあり、それを全体としての意識の場に統合することが難しい場合がある。

それについては、筆者自身の経験に基づいて考察したことがある(氏原 1998)。簡単にくり返しておくと、小学校高学年の折り、とある山道でおびたしいクモが巣を張っているのを見て、このクモたちはこんな人里離れた山奥で誰に見られることもなく生きていいんだろうか、と思ったことがある。この“誰に”とはもちろん私を指している。クモが私とは別個の存在であることは分かっていた。私とその山道をやがて通りすぎ、再び来ることの当分ないこと、その間クモは私に見られることなく、また私を見ることもなくそこに生き続けることも分っていた。しかしその時私は、クモがそのように私とまったく無関係に存在していることに、一種異様な感じをうけたのである。

それまで、クモはもちろん、世界はすべて自明のものであり、見えていた。都会にある私の家も「見えて」いた。訪ねたことのないアフリカの奥地ですら、「未見の土地」として見えていた。逆にそれらから見返されていた、といってもよい。しかし、山道のクモたちが私を見返すことはなかった。私が見る限りそれらはそこにあったけれども、私が見ることをやめればもう存在しない。同時に私も、彼らにとっては存在しなくなる。しかし再び見ると同じように彼らはそこにいた。つまり彼らは私とはまったく独立した存在としてそこにいた。オーバーに言えば、この時私のコスモロジーに亀裂が生じ、自明の世界が崩れクモはクモそのものとして、束の間の、そして「いま、ここ」にしかいない、かけ代えないものとして私の前にたち現われたのである。しかし、そうした存在の相対性に気づいたのはもっと後になってからのことである。その時は妙な生まましさとおびたしい数の豊かさと奇妙な静寂とに、一瞬圧倒される思いであった。一種の病理現象に近い。

似たようなことが、女の子に対して起った。それまでは、女の子など分りきった存在

であった。きまじめで泣き虫ですぐに告げ口をする。それがある中年作家の述懐するよう
に、ある朝登校すると、ブルマーの下からつき出た太腿のまぶしさに、目のやり場を失っ
たのである。細い首筋や薄い耳たぶが可憐に見え、近寄り難く秘密に満ちた存在に変容し
た。しかもやり場に困ったはずの目が、あらがいがたくそこに惹きつけられる。そして芽
生えてきた性の衝動と、それをどう結びつければよいのか、果てしない空想の糸を紡ぎ始
めていたのである。

以上の経験は、ほとんどが感覚レベルで意識されていた。それを感情レベルと、言語レ
ベルでどううけとめるかが、この時期の課題なのであろう。しかしそのためには時間がか
かる。その間、ある程度現実からひきこもる必要があるのかもしれない。するとおとなの
側からする守りが要ることになる。何よりも、本人にもわけの分らぬ奇妙な体験を意味づ
けることが重要である。それが共同社会に十分理解され、かつうけ容れられるもの、とし
てである。現代の若者たちに、とくに性をめぐって最も欠けている点であろう。いばら姫
が100年の眠りにつくことには、そのような意味があると思う。

(5) 眠り

ベッテルハイム（前掲者）は、思春期から青年期にかけては、長い静かな自己への集中
が要る、という。前の小節に述べたように、思春期には身心共に大きい変化が訪れる。そ
れまでに、子どもは子どもなりに一応でき上る。外的世界の把握も、それなりに確かなも
のになっている。いろいろな変化はあるにしろ、それさえも含みこんだ不動の、崩れるこ
とのない自明の世界ができていく。それが内側から崩れるのである。だから外側が、つま
り周りのおとなたちが、しっかりした柱で支えてやらねばならない。多分それが眠りの意
味するものである。白雪姫は小びとたちの家に、最後にはガラスの柩の中で、同じグリム
童話のラプンツェルも塔の上に、囚えられた形とはいえ、いわば外の世界から隔離される
必要があった。いばら姫の城のいばらの生い茂ったのも、姫を外界から隔てるためであ
った。時の至らぬままに姫に会おうとした王子たちの無残な死にざまは、守りの厳しさ、逆
にいえば守りのない場合の恐ろしさを示している。

守りのない場合、たとえば昨年度とり上げたフロイトの症例ドーラ（1995）のようなこ
とが起るのである。彼女がA氏に強引にキスされたのは14才の時であった。父親がA氏の
妻と親しくなり、その代りにA氏がドーラに近づくのを黙認する、という複雑な関係であ
る。そして神経症の治療のため、父親ともA氏とも知りあいであるフロイトのもとを訪れ
た。もちろんこうした事情をすべてドーラが承知していたわけではない。何となく肌で感
じていたのである。自分には隠されたまま何が周りで進行している、という感じである。
しかもフロイトの努力は、それらをすべて抑えこんだままで、もっぱらドーラの性の目覚
めを言語化することに集中された。その際、少女の性に対する羞じらいや嫌悪感が尊重さ
れた形跡はない。羞じらいや嫌悪感は、この時代のこの年頃の少女たちには当然の反応で
あったと思われる。それが許容されて、つまり共同社会の一員として当然のこととしてう
け入れられて、少女たちはゆっくり成熟することができる。それをドーラの感じている全
体的感覚レベルの体験が抑えこまれ、無理やり一面的な言語レベルで意識化させられる、
いわゆる合理化が強制されており、A氏への愛のしるしと決めけられたのでは、3か月で
分析が中断したのもやむをえなかったと思われる。

ところでドーラがフロイトの説得に納得し、A氏の愛を受け容れておればどうなったであろうか。おそらく感覚的身体的プロセスと思考的プロセスとの解離が生じ、両者をつなぐ感情プロセスが働かず、性的結合が喜びも怖れも伴わぬ一つの”自然現象”に墮したのではないか。Heuscher (ibid) はいばら姫の眠りをそのように考える。彼は城全体を一人の人間を表わすとし、塔の上でつむを操つる老婆は、体の上部、つまり頭で抽象的な思考を紡ぎ出しているのだという。そのため本能的具体的なプロセス—私のいう感覚レベルの意識—が閉め出され、城全体が生気を失うのである。思春期を、子ども時代の比較的無意識に近い具体的感覚的な世界から、現実に対応する意識的抽象的思考の世界に移行する時期とし、その否定的な面を眠りに見ようとするのである。たしかに思春期にはそういう一面があるが、逆に感覚的なものが妙に生々しく突出し、それをどう自分の世界にとり入れるかがこの時期の重要な課題と思われるので、これだけの分析では物足りない感じがする。

フォン フランツも、この眠りを、母親コンプレックスによって女性としての自発性が眠りこんだ状態、という。そして、結婚も出産も誤りだったと言い続ける母親の娘が、自分には自分なりに生きる値打ちがあると思えず、何でも人の言いなりになってしまい、とうとう痩せ症になった例をあげている。彼女はユング派の粹組によって、アニムスの悪しき働きを主張したがっているのであるが、その点は Heuscher の考えにかなり近い。ドーラが追こまれた状況が、まさしくそういうものだったかもしれないことはすでに述べた。

河合は、つむの一突きに初潮、あるいは(4)で述べたような諸体験、そこから生じる知性化などを見(その限り Heuscher やフォン フランツの考えもとり込まれている)、その後で時の至るまでの眠りの必要なことを述べている。

(6) 王子—癒しのプロセス

そして100年の時が経って王子が訪れる。多くの若い生命を呑んだいばらの生垣は、大輪の花を咲かせて王子を迎え入れる。そして姫は目を覚まし、二人はめでたく結ばれるのである。ここで大切なことは、王子がそのために何もしていないこと、姫もただ眠り続けていただけであること、である。つまり今までの劇的でさえあった物語は、主人公の無為によって大団円を迎える。すでに述べたように、河合は時の至ることの重要性を指摘している。おそらく事は成るようにしか成らない。“癒し”を考える場合このことが重要である。そこで眠りを、あるいはこの物語全体を一つの症状として考えてみる。当初王と王妃に子どもないことは、いわゆる創造の病に当ることを示唆した。蛙の出現は無意識からの働きかけと見なしうが、お妃はここでも受け身である。姫の誕生はまさしく新しい可能性の出現であるが、13番目の仙女の予言が100年の眠りをもたらす。症状が、生かされぬ可能性を表わすことは少なくないが、この仙女自体がその可能性を表わすことはすでに考察した。王の意図的な試みは効を奏さない。そして姫は眠りに陥る。これを思春期やせ症(成熟拒否)、離人症(現実感の喪失)、うつ状態(意欲喪失)、ヒステリー(解離性障害)などの症状になぞらえることができる。ところがこれらの多彩な症状は、時が満ちて目覚めと共にすべて解消するのである。

一見したところ、これらはすべて自然のプロセスである。破局にまで至らないのは、この物語の表わす病理水準が神経症レベルだからであろうか。あるいはこの物語は、あらゆる

る女の子が思春期から青年期にかけて通過するプロセスを描いているのであろうか。しかしいばらにとりこまれ無残に死んだ王子たちもいる。ただし、姫が時の来るまで安泰に眠り続けるために、いばらは必要な守りではあった。いずれにしろ、この物語は、自然のプロセスいわば症状に苦しむ患者の自己治癒力、を示しているものと思いたい。さらにいえば、症状とはまともな発達のプロセスであり、だれしものがひき受けてゆくべきものなのかもしれない。つまり、自然な発達につきものの苦悩を避けようとする時、いわゆる症状が生じてくる可能性もある。その限り癒しとは治すことではなく、治ることでないのかもしれない。それは必然的な成長のプロセスであり、癒し手たちの役割は、時が来るまでひたすら見守ることであるように思われる。

そこで次節では、もう一つのグリム童話「三枚の羽」を通して、今度は男の立場から、無為による成就について考えてみたい。

3. 三枚の羽

物語の要約「王が三人の息子の一人に後を継がせようとする。そこで彼らを旅に出し、最もよいじゅうたんを持ち帰った者を選ぶことにする。そしてそれぞれの行先を決めるために三枚の羽を飛ばす。二枚は東と西に飛び利口な二人の兄たちがその方向に行く。3枚目は真下に落ち、末っ子のでくの坊はそこに座りこむ。しかしそこに揚げ蓋のあるのに気づき、階段を降りてゆく。扉があり開けると大きなひき蛙がたくさん小さなひき蛙に囲まれている。でくの坊が、最もよいじゅうたんが欲しいと言うと、すばらしいじゅうたんを出してくれる。兄たちは百姓女の着いたらしゃを持って帰る。でくの坊が勝つのだが兄たちは承知しない。そこで今度は、最もよい指環を持ち帰った者が選ばれることになる。同じように王が羽を飛ばし同じようにでくの坊が最もすばらしい指環を持ち帰る。しかし再び兄たちが異議を唱え、最も美しい娘を連れ帰った者に王位が約束される。ひき蛙は、6頭のはつかねずみの引くりぬいた人参の車を出し、小さなひき蛙を一匹選ぶように言う。でくの坊がそうすると蛙は美しい少女となり人参とねずみは6頭立ての見事な馬車になる。兄たちは手近な百姓娘を連れ帰り、又してもでくの坊の勝利となる。しかし兄たちは今度も承知せず、娘たちが天井からつるした輪を飛び抜けることを要求する。二人の百姓娘は失敗して足や手の骨を折り、でくの坊の連れ帰った娘だけが軽々と飛び抜ける。そしてでくの坊が晴れて王位を継承する」

(1) 王と末っ子

この話についてはフォン フランツ (1979 a) の精緻な分析がある。本稿は主にそれに拠っているが、前節に述べた“癒し”ということから、「いばら姫」と共通するテーマに絞って考えることにする。

お話のはじめはよくある老王と三人の息子の状況である。王が集合的意識を代表していることはすでに述べた。王妃も姫もないことは、ここに女性的なものがどのように導入されるか、が問題であることを示している。息子たちの一番下がでくの坊であることは、王の衰えは、かつては十分指導力を発揮しえた集合的意識の中心が力を失いつつあること

を示している。そこで女性原理の導入もさることながら、今まで一番目立たなかった、つまり十分機能していなかった、そのためでの坊として蔑まれていた末子が活躍しなければならぬのである。ディークマン（1992）は、ユングの意識の四機能説をとり上げ、王を主機能、二人の兄を二つの補助機能、末っ子のでの坊を劣等機能とし、この話が今こそ劣等機能の開発の必要なことを示唆している、という。ベッテルハイム（前掲者）は、での坊は子どもたちのおとな、とくに親、に対する劣等感の表われとし、まったく瓜二つの兄が二人いることを両親の代理と見なしている。一人でもよいのに二人いるのは、間接的にエディプス状況が表わされている、というわけである。

いずれにしろここで問題になっているものは、「いばら姫」では13番目の仙女に当たると考えてよい。女性的要素ということでは、忘れられた大母神に通じる。蔑まれ無視されているということでは、愚かな末っ子である。今まで見捨てられていたものをとりこむことで、停滞した不毛の状況に活気が甦るということでは、いばら姫と重なっている。

(2) 羽

そこで王は城の外に出て、息子たちの行先を羽を飛ばすことによって決めようとする。羽は風を受けて飛ぶ。昨年度「ガチョウ番の娘」について述べたように、風そのものは誰の目にも見えない。風にそよぐ葦や風の作り出すざわめきを通してその存在が推測されるにすぎない。無意識が直接意識されることはない（定義上そうなっている）にもかかわらず、それと知られるのは、その働きが現在の意識に及ぼしている影響を意識することによって、である。だから風によって行先を決めるのは、賢し^{さか}らな自我の意図によって決めるのではなく、無意識の力に成行きを任せることを意味している。ゆきづまった集合的意識の中心である王（自我と考えてよい）が、より大いなるもの、無意識の働きに従うことを決意しているのである。

ところで兄たちの羽はそれぞれ東と西に飛び、二人はいそいそと広い世界に出かけていく。しかしでの坊の羽は一旦は上に上ったものの、そのまま同じ場所に落ちる。行き場のないでの坊は地面に座りこみ、途方に暮れる。しかしこれがわれわれにはなじみのある脚下照顧ということであろうし、チルチルとミチルが長い遍歴の後、結局わが家で青い鳥を見つけることと軌を一にしている。彼はそこに揚げ蓋のあるのに気づき、それを揚げて地下へ通じる階段を降りてゆく。河合（1977）はこれについて、ヨーロッパ人の関心が横に、つまり外的世界の拡大に向かっている時に、地界、すなわち自分の内界に関心を向けることを示す、フロイトと訣別する以前のユングの夢をあげている。自分の知らない古い「私の家」の二階から地階へ降りて行き、ロココ風の部屋から原始時代の洞穴に至る、あの夢である。

(3) じゅうたん

ところで王が最初に持ち帰ることを命じたじゅうたんについては、フォン フランツの明快な説明がある。じゅうたんは、オリент世界と接触するまでヨーロッパ人には知られていなかった。しかし遊牧のアラビア人にとっては極めて重要な意味をもっており、新しい土地に着くと、彼らはまずじゅうたんを広げることによって大地とのつながりを確かめ、その上にテントを張ったのである。それによって未知の土地の悪霊を防ぐことができ

た。当然じゅうたんには宗教的意味が含まれ、抽象化されたランプ（アラーの知恵）やかもしか（神を求める人間の魂）の象徴が織りこまれていた。だから、そこには運命の秘密、自我の思惑をはるかに越えた人生の象徴的パターンが含まれ、人々に、運命に抵抗する代りにそれを実現することを求めてもいたのである。また織ることには、「いばら姫」における運命の糸を紡ぐのと同じ意味がある。

だから王がじゅうたんを求めたのは、宮廷にはもはやよいじゅうたんがなくなって、大地につながる女性原理が忘れられていることを意味しており、今やそれを持ち帰ることが必要なのである。そしてそれは、一番未熟な、それだけ無意識に近い、でくの坊によってもたらされる。

(4) ひき蛙

ここで再びひき蛙が登場する。フォン フランツは、ひき蛙はどちらかといえば女性を、蛙は男性を表わすという。また、でくの坊が地界に降りてゆくに当って、ちゃんと人工の階段がついているのは、それが未知の世界に導く通路ではなくて、かつて往来のあったしるし、だから以前は意識されていたのに今は忘れられた心の層を表わす。そしてひき蛙を、キリスト教に教化される以前のゲルマンの大地母神たちの落魄した姿だとする。

そもそも物語の発端が男ばかりであるのは、地上が男性原理に覆われていることを意味している。それにはそれなりの理由があったのであろう。しかし王は老い、新しい支配原理を求めている。ただそれは何らかの形で女性的な要素を取り入れたものでなければならない。しかしそれらは地下の無意識界に追いやられ、ひき蛙という醜い姿でしか存在できない。「蛙の王子」の姫は最後まで蛙への嫌悪感をなくすことができなかった。しかしでくの坊は、ひき蛙に対してはほとんど抵抗感がないようである。ベッテルハイムのいうように、それだけ無意識に近い存在であったのだろうか。またひき蛙の方も、でくの坊に対しては全面的に協力している。王の態度が示すように、その地上に出る時が近づいていたからだろうか。

錬金術的にいえば、男性原理である硫黄の熱は女性原理である塩によって冷されねばならない。それは太陽（ソル）と月（ルナ）の結合になぞらえられるが、ルナの中にとりこまれたソルは、そこに閉じこめられ腐敗消滅しかねない。先に述べたように、神の花火は肉体を通して現実化されるのだが、まかり間違うと消える。この話でいえば、ひき蛙は巨大な竜となってでくの坊を呑みこんでもおかしくないのである。しかし万事が好都合に運ぶ。それは王子がまさに時の満ちた時いばら姫の城に入りこみ、何の苦勞、英雄的行為をすることなく、姫と結ばれるのに対応している。

この後でくの坊は、指輪と美しい少女を手に入れ、少女の力で無事王位を継ぐ。そしてその間もほとんど自分では何もしていない。いわばすべて成行きませ風まかせなのである。でくの坊がひき蛙の少女と結婚したのかどうかは定かでない。しかし女性原理が回復されて王国が末永く栄えたのは確からしい。

以上、何もせぬことが癒しにつながりうることを、主に「いばら姫」を通して、さらに「三枚の羽」で補う形で述べてきた。その場合カウンセラーにできることは、守りの場を提供することだけだと思う。しかしカウンセラーが、二人して作る場の方向性のごときものを微妙に嗅ぎ分けておくことが不可欠である。このタイプの話は、英雄神話の当てはま

るケースとは少しばかり病理が異なるのかもしれない。

文 献

- ベッテルハイム, B. (波多野・乾訳) 昔話の魔力 評論社 1978
ディークマン, H (安溪真一訳) おとぎ話を生きる人たち 創元社 1992
ドルト, (榎本謙訳) 無意識の身体像 1. 2. 言叢社 1994
フロイト, S. (細木, 飯田訳) あるヒステリー患者の分析の断片 フロイト著作集 5
276~366 1995
エレンベルガー, H. (中井, 木村監訳) 無意識の発見 上下 弘文堂 1980
Frazer, J.G The golden bough The Mac Millan 1978
Heuscher, Briar Rose in psychiatric study of myth and fairytales 160~171 Charles C
Thomas 1974
ユング, C. G. (村本詔司訳) 心理学と宗教 人文書院 1989
ユング, C. G. (野田倬訳) アイオーン 人文書院 1990
Jung, C.G. Mysterium Coniunctionis GW 14 Walter 1968
河合隼雄 昔話の深層 福音館書店 1977
河合隼雄 中空構造日本の深層 中央公論社 1982
河合隼雄 心理療法序説 岩波書店 1992
リューティ, M (野村滋訳) 昔話の本質 福音館書店 1974
マレ, K. -H. (小川真一訳) <子供>の発見 みすず書房 1983
シュヴァリエ, J. ゲールブラン, A (金光仁三郎他訳) 世界シンボル大事典 大修館 1996
氏原寛 童話の深層分析とその理論 森, 氏原 (編) 名作童話の深層 創元社 4-40 1989
氏原 寛 意識の場理論と心理臨床 誠信書房 1993
氏原 寛 山のかなたの空遠く一男の場合 氏原, 菅 (編) 思春期のこころと体 ミネルヴァ
書房 1988
フォン フランツ, M. -L. (氏原寛訳) おとぎ話の心理学 創元社 1979a
フォン フランツ, M. -L. (秋山, 野村訳) メルヘンと女性心理 海鳴社 1979b